

説教 『安息日にポカンとなる』 山本 護 牧師

聖書 創世記2:2~3 /ルカによる福音書14:1~4

「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた(創世2:2)」。これが安息日の由来。それにしても、神が安息なさるとはどういうことだろうか。

「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された(2:3)」。

聖別のイメージを膨らませてみよう。第七の日(土曜日)に神が安息し、すべてが凧いでいる感じか。

「凧いだ」聖別は、やがて厳しい掟となる。

「六日の間は仕事をする事ができるが、七日目は主の聖なる、最も厳かな安息日である。だれでも安息日に仕事をする者は必ず死刑に処せられる(出エジプト31:15)」。

イエスはこの掟を否定するというより、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない(マルコ2:27)」と根本的に意味づけている。

いったい安息日の何が「人のため」になるのか。休息か、神を讃美することか、創造主のようにすべて手放してポカンとなることか。

安息日の精神は「奴隷や家畜を強制的に休ませる=人道」という説がある。そうかもしれない。しかし、いつの時代も労働は歓迎され、強いられない勤勉はとりわけ尊敬される。

安息日とは、労働や義務の中断に他ならない。ポカンとなって心が凧の状態になること。そうであってこそ安息日は、聖ではないか。

「神はすべて～仕事を離れ～聖別された(創世2:3)」ように、私たちも毎週「すべての決まりごと」から解き放たれたい。信仰的な決まりごととも然りだ。「主の日は仕事を休んで教会で礼拝すべき」といった「～すべきこと」になってしまったなら、中断にはならず、聖別されないだろう。

第七の日に安息なされた神(2:3)に、人間は「かたどられた(1:27)」のだから、安息する私たちは、じんわり、礼拝を献げたくなる、と思う。

これが都合のいい話に聞こえたとしても、主の日には、皆さん一人ひとりの義務や責任を中断してほしい。そしてポカンと安息し、自分自身に尋ねてほしい。

意識せずとも、皆さんは御自身の聖なる心に動かされ、毎週ここで礼拝が実現しているではないか。

敬虔な会堂長は「働くべき日は六日ある。その間に治してもらうがよい。安息日はいけない(ルカ13:14)」と群衆に言った。では安息日は、「病の苦しみ」に、歯を食いしばってでも休むべき日なのか。

イエスは安息日に(14:1)、「病人の手を取り、病気をいやしてお返しになった(14:4)」。

人間は、己が意志で義務を中断できるが、病の苦しみや不安はどうにもならない。病がその人の安息日を奪っているからだ。

だからイエスは躊躇なくその人の病を癒す。イエスの業は、安息日を聖とするためでもあった(6:5)。

イエスの周囲にいた人々はファリサイ派議員の仲間で(ルカ14:1)、安息日なためにいくらか過敏であったか。イエスは病者を前に律法の専門家に問う。

「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか(14:3)」と。「彼らは黙っていた(14:4)」。

この沈黙からは、悔い改めも憎悪も生じうる。数十年間守って来た律法「～すべきこと」を、イエスの問いで中断できたなら、彼らも聖とされるだろう。

聖なる安息日は、六日間働いた七日目の土曜日(創世2:2:3)。私たちはキリストが復活した週の初めの日(ルカ24:1)を聖とし、そこから働き出す。世の諸々を中断し、身軽になって新たに出発するのだ。



《おまけのひとこと》

拘束から解き放たれても 自己愛に囚われていたなら癒しは薄っぺらい ポカンとなる安息日が
あなたをあなた自身から解き放つ キリストは問う その檻なら あなたの手で壊せるのでは と